

保育所年中児の動的学校画における特徴

武藤 久枝* 加藤 孝正**

Analysis of Person-figures in Kinetic School Drawings by Five-Year-Old Nursery School Children

MATSUO-MUTO Hisae KATO Takamasa

要 約

本研究の目的は、幼児期の動的学校画（Kinetic School Drawings、KSD）の人物像の特徴に関する実証的知見を得ることである。保育所年中児298名に対して集団でKSDを実施した。そのうち、本人、友達、先生の3者が描かれた80名のKSDを分析対象として、①人物像の人数（友達の数、先生の数）②描画順位③活動内容④シンボル（花、木・草、家、蝶、ハート、魚、印）⑤スタイル（包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジング）⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準⑪基底線と太陽について性別の出現を検討した。その結果、性差が認められたのは活動内容、シンボル、スタイルであった。女兒がシンボルを描く割合は男児よりも有意に高く、その種類も多かった。また、女兒の活動内容における「ブランコ・鉄棒」の出現、およびスタイルにおける透視画の出現はそれぞれ男児よりも有意に高かった。

キーワード：動的学校画（KSD）、人物像、年中児

I. 問題

幼児を対象とした動的学校画（Kinetic School Drawings：以下、KSD）に関する実証的研究においては対象が小学生から大学生までに関するものが大部分（鈴木他、2003：鈴木他、2004：田中、2007、2011、2012）であり、幼児期のKSD研究は最近になって取り組まれ始めたばかりである（松尾・加藤、2013、2014、2016）。KSDでは保育所や幼稚園などの保育場面を描くことによって対象児の適応状況や集団力動を把握できることから臨床的に有意義と考えられるが、現在は分析指標の出現率等に関する実証的資料を得て、その妥当性を検討し、代表的指標を確立させることが必要な段階である。

われわれは幼児期のKSDの特徴に関する実証的知見を得ることを目的として保育所年長児のKSDの分析（松尾・加藤、2013、2014、2016）に取り組み、いくつかの知見を得てきた。代表的な指標の分析として、①人物像の人数（自己像、友達像の数、先生像の数）②描画順位③活動内容④シンボル（花、木・草、家、蝶、ハート、魚、印）⑤スタイル（包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジング）⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準⑪基底線と太陽、を設定しその出現を分析した。その結果、現在までに明らかになったのは、年長児のKSDにはいくつかの指標において次のような性差が認められたことである。

1) 描画順位において、男児の描画順位は自己像、友達像、先生像の順が多いのに対して、女兒の描画順位では自己像、先生像、友達像の順が多いこと、

* 中部大学現代教育学部幼児教育学科

** 同朋大学

2) 活動内容では、戸外スポーツに関する描画内容が男児に多いこと、3) スタイルの出現は男児に多く、とりわけ包囲や鳥瞰図は男児に多いこと、4) シンボルは女児に多いこと、などである（松尾・加藤、2016）。

また、性差が認められなかった指標は一番大きい人物像、自己像の位置、高い位置の人物像、自己像に最も近い人物像、描画水準であり、その内容は、5) 約半数の子どもが先生像を一番大きく描くこと、6) 約8割が自己像を紙面の周辺に小さく描くこと、7) 紙面の一番高い位置に描くのは先生像と友達像がそれぞれ約4割であること、8) 約7割が自己像の近くに友達像を描くこと、9) 活動内容を読み取る段階の描画水準は約2割にとどまること、などである（武藤・加藤、2016）。

これらの特徴や性差は何歳頃から出現するのだろうか。発達的な特徴を把握するためには年長児以外の低年齢の年中児にまず、対象を広げてその分析指標について検討する必要がある。また、KSDに先立ってよく用いられてきた描画法に動的家族画（Kinetic Family Drawing: KFD）があり、KFDは「あなたの家族が何かしているところを描いて下さい」との教示のもとに実施する。われわれはKFDの年長児の月齢別と性別の検討（武藤・加藤、2013）を行った結果、発達月齢による違いはみられなかったけれども性差が認められたことから、年長児のKSDにおいても性別をその重要な要因として考え、分析を行ってきた（松尾・加藤、2016、武藤・加藤、2016）。したがって、KSDにおける特徴が何歳頃から出現するかについて対象を年中児に拡大して検討するにあたって、まず、年長児の分析（松尾・加藤、2016；武藤・加藤、2016）と同様の指標を設定して性別の検討を行う必要があると考えられる。

II. 目的

本研究は、年中児のKSDにおける①人物像の描出（先生の数、友達の数）②描画順位③活動内容④シンボル（花、木・草、家、蝶、ハート、魚、印）⑤スタイル（包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジング）⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準

⑪基底線と太陽の出現に焦点を当てて性別の検討を行うことを目的とする。

III. 方法

年長児にKSDを実施した前報（武藤・加藤、2016）と同じ手続きを年中児に対しても行ったため、本研究では概略を述べる。

1. 実施方法

(1) 用紙他

A4サイズの画用紙とBの鉛筆（消しゴム付き）。

(2) 実施手続き

①KSDの実施：保育所年中児クラスにおいてKSDを実施した。

②教示等：Knoff & Prout (1985) をもとにして筆者らが幼児向けに修正した内容にしたがって、クラス担任が集団または個別で実施した。KSDの教示は「保育園でお友達や先生や自分も入れて何かしているところを描いて下さい」である。描画後は描かれた人物像の横に描画順位を担当に記入するように求めた。用紙裏面には人物像の間柄（本人、友達、先生）と描画順位と何をしているところかについて本人または担任が記入するように求めた。

(3) 説明と同意

描いたKSDを担当以外にみせても良い場合は画用紙の裏面に○を、拒否する場合には×を書くことによって子ども本人の同意を得た。研究の趣旨と手順の説明文を園内に掲示して保護者の了解を得た。

2. 対象と実施時期

2013年11月～2014年2月に保育所17ヶ所において年中児を対象に実施した。

3. 収集資料と分析資料

(1) 収集資料

保育所年中児クラスにおいて298名のKSDを収集した。性別の内訳は男児141名（47.4%）、女児150名（50.3%）、性別不明7名（2.3%）であった。

(2) 分析資料

収集資料のうち、人物像の間柄不明や人物が描かれていない場合などを除き本人と友達、先生の3者

が描かれた80名を本研究の分析対象とした。

4. 分析項目

Knoff & Prout (1985) を参考に分析項目として、以下の11項目を設定した。①人物像の人数(自己像、友達像の数、先生像の数)②描画順位③活動内容④シンボル(花、木・草、家、蝶、ハート、魚、印)⑤スタイル(包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジング)⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準⑪基底線と太陽である。分析方法は、①人物像の人数②描画順位③活動内容④シンボル⑤スタイルと⑪基底線他については松尾・加藤(2016)と同様であり、また、⑥自己像の位置⑦一番大きい人物像⑧高い位置の人物像⑨自己像に最も近い人物像⑩描画水準については武藤・加藤(2016)と同様であるため、本研究では概略を述べるにとどめる。

(1) 人物像の人数

用紙裏面に記入された間柄から人物像の「合計人数」「友達の数」「先生の数」を求めた。

(2) 描画順位

「自己像」「先生像」「友達像」の順位を集計した。描画順位の第3位以降は一括して第3位とした。「先生像」や「友達像」が複数描かれている場合は順位の高い方を集計対象とした。

(3) 活動内容

活動内容では、「球技」「鉄棒・ブランコ」「戸外スポーツ」「遊び」「散歩」「遠足」「食事」「その他」の8カテゴリーを設定した。

(4) シンボル

人物像や紙面に描かれた「花」「木・草」「家」「蝶」「ハート」「魚」「印(星、ダイヤ形等)」をシンボルとした。各個人のシンボルの有無と種類を集計した。1種類でもシンボルが出現した場合を「シンボル有」として、その人数を集計した。

(5) スタイル

Knoff & Prout(1985)にしたがって、包囲、鳥瞰図、透視画、区分化、エッジングの出現を集計した。1種類でもスタイルが出現した場合を「スタイル有」として、その人数を集計した。評定者2名が評定して一致した場合を取り上げた。

(6) 自己像の位置

紙面の空間図式について高橋・高橋(2010)、武藤(2011)にしたがって紙面を5分割した。自己像が中央部に描かれた場合とそれ以外、判定不能の3通りに分類した。

(7) 一番大きい人物像

描かれた複数の人物像の中で最も大きい人物像を一番大きい人物像とした。

(8) 高い位置の人物像

描かれた人物像の頭頂部が紙面の一番上部にある人物像を高い位置の人物像とした。

(9) 自己像に一番近い人物像

自己像とそれ以外の人物像との距離をミリ単位で測定した。自己像に最も近い人物像を求めた。

(10) KSDの描画水準

KFDの描画水準に関する先行研究(山尾・田中、2004; 武藤・加藤、2013)を参考にしてKSDの描画水準をA、Bの2段階に設定した。水準Aは活動内容が絵から読み取れない段階、水準Bは用紙の裏面等に記述してある活動内容が絵から読み取れる段階である。

(11) 基底線と太陽

雲や電線などを上部の基底線として、地面や草などを下部の基底線とした。また、太陽の出現の有無を集計した。

5. 統計的処理方法

(1) 単純集計

分析項目の出現人数を集計した。「合計人数」「友達の数」「先生の数」「シンボルの種類」では平均を求めた。

(2) 性別の比較

各項目について性別にクロス集計を行って χ^2 検定をした。「合計人数」「友達の数」「先生の数」「シンボルの種類」についてはt検定によって性別を比較した。分析にはSPSS (Statistical Package for the Social Science)解析ソフト(第21版)を用いた。

IV. 結果と考察

1. 分析対象の性別と月齢

分析対象80名の平均月齢は63.5ヶ月(SD = 3.6)、性別は男児38名(47.5%)、女児42名(52.5%)であっ

た。性別、月齢別の分布を示す（表1）。

表 1. 性別、月齢別にみた対象児の分布

数字は人数（%）				
	58～60 ヶ月	61～65 ヶ月	66～70 ヶ月	合計
男児	10 (26.3)	13 (34.2)	15 (39.5)	38 (100.0)
女児	10 (23.8)	19 (45.2)	13 (31.0)	42 (100.0)
合計	20 (25.0)	32 (40.0)	28 (35.0)	80 (100.0)

2. 人物像の人数

(1) 「合計人数」

本人を含めた人物像の「合計人数」の平均は5.3名（SD = 3.4）であり、その内訳は3名（29名：36.2%）、4名（22名：27.5%）、5名（7名：8.8%）、6名（7名：8.8%）、7名以上（15名：18.7%）であった。「合計人数」の平均について、男児（5.2名、SD = 3.6）と女児（5.4名、SD = 3.3）との間でt検定を行ったが性差は認められなかった。

(2) 「友達の数」

「友達の数」は平均2.7名（SD = 3.0）であり、その内訳は1名が最も多く（34名：42.5%）、2名（24名：30.0%）、3名（8名：10.0%）と続き、4名と5名は同数（2名：2.5%）であった。「友達像」を15名以上（1名：1.3%）描いた場合もあった。「友達の数」の平均について男児（2.6名、SD = 3.1）と女児（2.8名、SD = 2.9）との間でt検定を行ったが性差は認められなかった。

(3) 「先生の数」

「先生の数」は平均1.2名（SD = 0.4）であった。ほとんどの場合1名（68名、85.0%）しか描かれていなかったが、「先生像」を3名描いた場合（2名：2.5%）もあった。「先生の数」の平均について男児（1.1名、SD = 0.27）と女児（1.3名、SD = 0.50）との間でt検定を行ったが性差は認められなかった。

3. 描画順位

「自己像」「友達像」「先生像」について描画順位の人数を集計した結果、第1位に描かれた割合が最も高かったのは「自己像」（50.0%）であり、続いて「友達像」（25.0%）、「先生像」（22.5%）であった（表2）。本人、友達、先生の順に描かれるようである。次に、性別の検討として「自己像」「友達像」「先生像」の描画順位について χ^2 検定を行ったが性差は認められなかった。

描画順位が本人、友達、先生の順に描かれることが多い本研究結果は年長児の描画順位（松尾・加藤、2016）と同じ結果であった。しかし、年長児では先生像の描画順位において男児は第3位に描くことが多いのに対して、女児は第2位に描くことが多いとの性差が認められたけれども、本研究では性差は認められなかった。描画順位に関しては発達に伴って性差が出現する可能性が考えられる。

4. 活動内容

性別にみた活動内容の出現率を示す（表3）。第1位は「遊ぶ」（47.4%）であり約半数を占めた。性差を検討した結果、女児は男児よりも「鉄棒・ブランコ」の出現が有意に高かった（ $\chi^2=6.42$ 、df=1、 $p<.05$ ）けれども、男児の出現は2名と非常に少なかったため参考程度の結果にとどめることが妥当と考えられる。「遊ぶ」が第1位でほぼ半数を占めた点は年長児の結果（松尾・加藤、2016）と同様であったけれども、年長児において男児に多くみられた「戸外スポーツ」は本研究では性差が認められなかった。活動内容に関しては発達に伴って性差が出現する可能性が考えられる。

表 2. 性別にみた描画順位

数字は人数（%）									
	自己像			友達像			先生像		
	男児（%）	女児（%）	計（%）	男児（%）	女児（%）	計（%）	男児（%）	女児（%）	計（%）
第1位	19 (50.0)	21 (50.0)	40 (50.0)	11 (28.9)	9 (21.4)	20 (25.0)	6 (15.8)	12 (28.6)	18 (22.5)
第2位	13 (34.2)	10 (23.8)	23 (28.7)	14 (36.9)	19 (45.3)	33 (41.2)	8 (21.1)	9 (21.4)	17 (21.3)
第3位	6 (15.8)	11 (26.2)	17 (21.3)	13 (34.2)	14 (33.3)	27 (33.8)	24 (63.1)	21 (50.0)	45 (56.2)

表 3. 性別にみた活動内容の出現

	数字は人数 (%)				
	男児 (%)	女児 (%)	合計 (%)	χ^2	p
1 遊ぶ	21 (55.3)	17 (40.4)	38 (47.4)	1.75	—
2 その他	8 (21.1)	10 (23.8)	18 (22.5)	0.09	—
3 鉄棒・ブランコ	2 (5.3)	11 (26.2)	13 (16.2)	6.42	*
4 球技	2 (5.3)	1 (2.4)	3 (3.8)	0.46	—
4 戸外スポーツ	3 (7.9)	0 (0.0)	3 (3.8)	3.44	—
6 散歩	1 (2.6)	1 (2.4)	2 (2.5)	0.01	—
6 遠足	0 (0.0)	2 (4.8)	2 (2.5)	1.86	—
8 紙芝居	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (1.3)	1.12	—

* p<.05

表 4. 性別にみたシンボルの出現

	数字は人数 (%)				
	男児 (%)	女児 (%)	合計 (%)	χ^2	p
シンボル有	2 (5.3)	28 (66.7)	30 (37.5)	32.09	***
内訳					
1. ハート	0 (0.0)	26 (61.9)	26 (32.5)	34.85	***
2. 印	2 (5.3)	20 (47.6)	22 (27.5)	17.95	***
3. 花	0 (0.0)	12 (28.6)	12 (15.0)	12.78	***
4. 家	0 (0.0)	3 (7.1)	3 (3.8)	2.82	—
5. 木・草	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (1.3)	1.12	—
5. 蝶	0 (0.0)	1 (2.4)	1 (1.3)	0.92	—
5. 魚	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (1.3)	1.12	—

*** p<.001

5. シンボル

シンボルの出現率を示す (表4)。「シンボル有」において性差が認められ、女児が1つでもシンボルを描く割合は男児よりも有意に高かった ($\chi^2=32.09$, $df=1$, $p<.001$)。この要因として、女児は男児よりも「ハート」 ($\chi^2=34.85$, $df=1$, $p<.001$)、「印」 ($\chi^2=17.95$, $df=1$, $p<.001$)、「花」 ($\chi^2=12.78$, $df=1$, $p<.001$) を描く割合が高いことが影響していると考えられるものの、いずれの場合も男児の出現数が5名以下と少数であるため参考程度にとどめておくのが妥当と考えられる。

また、「シンボルの種類」を分析した結果、平均0.93種類 ($SD=1.52$) であった。「シンボルの種類」において性差が認められ、女児 (1.69種類、 $SD=1.76$) の方が男児 (0.08種類、 $SD=0.36$) よりも有意に多種類のシンボルを描いていた ($t=5.54$, $df=78$, $p<.001$)。

本研究結果を年長児のシンボルの結果 (松尾・加藤, 2016) と比較すると年長児女児のシンボルの種類 (1.64種類) は年中児女児のシンボルの種類とよく似た値であるのに対して、年長児男児のシンボルの種類 (0.35種類) は年中児男児のそれを上回っている。ここから、年中児において女児は既にシンボルをよく描き、その種類は年長児とほぼ同様であるのに対して男児ではシンボルをほとんど描いていない状態であり、年長児になってから描き始めるとみられる。シンボルを描き始める年齢には性差の可能性が示唆される。

6. スタイル

鳥瞰図の出現はなかったため、包囲、透視画、区分化、エッジング、「スタイル有」および性別の出現率を示す (表5)。「スタイル有」の出現率では性差が認められなかった。女児は男児よりも透視画 ($\chi^2=5.60$, $df=1$, $p<.05$) が有意に高い出現率であった。この要因として人物像の身体部分の一部が建物や机等と重なって描かれていることが多くみられることが影響していると考えられ、これは、まだ低年齢であるために線をうまく描き切れなかったりするためではなかろうか。いずれにしても男児の出現が3名と少人数であるため参考程度とすることが妥当と考えられる。

本研究ではスタイルの出現に性差が認められなかったけれども年長児の結果 (松尾・加藤, 2016) では、男児の方が女児よりもスタイルの出現が有意に高く、その内訳も男児の方が女児よりも包囲と鳥瞰図の出現が有意に高いとの結果を得ている。スタイルに関する年中児の性別の特徴は年長児とは異なる特徴を示していた。スタイルに関しても年長児になると次第に性差がみられる可能性が示唆される。

透視画の例として、図1は5歳2ヶ月の女児による「ぶらんこしている」である。紙面やや右下方にブランコが2つありブランコに乗った描画順位第1位の自己像が「ぶらんこしている」と描かれている。ブランコの外に立っているのは先生像であり人物像の中では最も大きく、自己像の最も近くに描画順位第3位で位置して「悪いことしないか見ている」と描かれている。もう1台のブランコには描画順位第2位の友達像1が「ぶらんこしている」と描かれ

表 5. 性別にみたスタイルの出現

	数字は人数 (%)				
	男児 (%)	女児 (%)	合計 (%)	χ^2	p
スタイル有	20 (52.6)	24 (57.1)	44 (55.0)	0.16	—
内訳					
1. 包囲	15 (39.5)	14 (33.3)	29 (36.3)	0.33	—
2. 透視画	3 (7.9)	12 (28.6)	15 (18.8)	5.60	*
3. 区分化	4 (10.5)	5 (11.9)	9 (11.3)	0.04	—
4. エッジング	1 (2.6)	1 (2.4)	2 (2.5)	0.00	.

* p<.05

ている。自己像と友達像1とは服の胸に同じハートが描かれていること、頭の上にもハートが描かれていることから本人にとって同一視の対象や仲の良い友達として描かれているのではなかろうか。紙面の右上部には描画順位第4位の友達像2が「後ろに見えるはしごで上まで行った」として描かれている。紙面の左上部には最も高い位置に描画順位第5位の友達像3が「英語の練習している」として口からの吹き出しにはアルファベットが描かれている。友達像2と3のスカートでは女児の足が透けて見えている透視画である。また、自己像と友達像1とはブランコによってそれぞれ包囲されている。松尾・加藤(2016)は幼児期の包囲の下位分類として、個別包囲、部分包囲、集団包囲、二重包囲を挙げているが、それによれば、図1は自己像と友達像1をそれぞれ一人一人ブランコで包囲している個別包囲の例でもある。



図 1 透視画の例 (5歳2ヶ月、女児)

7. 自己像の位置

自己像を紙面の周辺に小さく描いた場合(85.0%)が8割以上を占め、紙面中央に小さく描いた場合(10.0%)、紙面中央に大きく描いた場合(5.0%)の出現率は低かった(表6)。自己像の位置について性差は認められなかった。本研究結果は、順位、出現率ともに年長児の報告(武藤・加藤、2016)とよく似た結果であった。自己像は紙面中央に描かれることが年中児、年長児ともに少ないようであり、これは図式期では自己中心性の表れとして自己像は紙面中央に描かれる特徴があるとの知見(加藤、1999)と一致しなかった。

表 6. 自己像の位置

	数字は人数 (%)		
	男児 (%)	女児 (%)	合計 (%)
いずれでもない	34 (89.4)	34 (80.9)	68 (85.0)
紙面中央に小さく	2 (5.3)	6 (14.3)	8 (10.0)
紙面中央に大きく	2 (5.3)	2 (4.8)	4 (5.0)
合計	38 (47.5)	42 (52.5)	80 (100.0)

8. 一番大きい人物像

一番大きく描いた人物像は、男女ともに約半数(52.4%)が先生像であり、友達像(27.5%)、自己像(18.8%)の順に続く(表7)。一番大きい人物像について判定不能を除いた79名を性別に検討した結果、有意差は認められなかった。先生像を一番大きく描く者が約半数を占めた点で年長児の報告(武藤・加藤、2016)と本研究結果とは一致した。しかし、第2位以降をみると、年長児では自己像(22.8%)と友達像(25.7%)とがほぼ同数であったのに対して、本研究では、友達像を大きく描く割合が自己像のそれを上回っていた。また、小学校5年生を対象とした鈴木他(2004)では一番大きく描かれた

のは先生像（64.6％）であり、これは本研究と一致しているが、第2位以降の自己像（24.2％）、友達像（11.1％）の順位は幼児期の年長児の報告（武藤・加藤、2016）や本研究結果と逆転している。以上から、人物像の大きさには年齢によって変化する可能性が示唆される。

表 7. 一番大きい人物像

	数字は人数（％）		
	男児（％）	女児（％）	合計（％）
先生像	20 (52.7)	22 (52.4)	42 (52.4)
友達像	11 (28.9)	11 (26.2)	22 (27.5)
自己像	7 (18.4)	8 (19.0)	15 (18.8)
判定不能	0 (0.0)	1 (2.4)	1 (1.3)
合計	38 (47.5)	42 (52.5)	80 (100.0)

9. 高い位置の人物像

紙面の高い位置に描かれた人物像の第1位は先生像（42.4％）であり、友達像（32.5％）、自己像（23.8％）と続く（表8）。判定不能を除いた79名について性別の検討を行ったが有意差は認められなかった。年長児を対象とした分析（武藤・加藤、2016）では高い位置の人物像は先生像と友達像とが同数で約4割（39.7％）を占めていた。先生像が第1位で約4割である点は年長児、年中児ともによく似た結果であった。しかし、年長児の結果と比べると、年中児を対象とした本研究では友達像の割合が年長児に比べて低く、代わりに自己像の割合は年長児（14.0％）よりも高かった。このことから、年中児では自己像を重要な人物としてとらえている場合が多いが年長児になると自分よりも先生や友達を重要とみなす割合が高くなると考えられる。

紙面の高い位置に描かれた人物像は本人にとって重要な人物や集団内での影響力の強い人物を表しているとの臨床的解釈（Knoff & Prout、1985）はあるもののそれを実証的に検証した知見は見当たらないようであり、高い位置の人物像の意味づけも含めた検討が今後は必要である。

表 8. 高い位置の人物像

	数字は人数（％）		
	男児（％）	女児（％）	合計（％）
先生像	14 (36.8)	20 (47.6)	34 (42.4)
友達像	14 (36.8)	12 (28.6)	26 (32.5)
自己像	10 (26.4)	9 (21.4)	19 (23.8)
判定不能	0 (0.0)	1 (2.4)	1 (1.3)
合計	38 (47.5)	42 (52.5)	80 (100.0)

10. 自己像に最も近い人物像

男女ともに約2/3が自己像の最も近くに友達像（67.5％）を描き、その割合は先生像（32.5％）の倍以上の出現率を示した（表9）。性別の検討を行ったが有意差は認められなかった。年長児の結果（武藤・加藤、2016）において自己像に最も近い人物像として友達像を描いた割合（73.5％）と本研究結果とはよく似た割合を示した。自己像の近くに友達像を描くことが多いのは小学生のKSD（鈴木他、2004：田中、2012）でも認められているが、この特徴は既に年中児から始まっているのかもしれない。

表 9. 自己像に最も近い人物像

	数字は人数（％）		
	男児（％）	女児（％）	合計（％）
友達像	26 (68.4)	28 (66.7)	54 (67.5)
先生像	12 (31.6)	14 (33.3)	26 (32.5)
合計	38 (47.5)	42 (52.5)	80 (100.0)

11. 描画水準

描画から活動内容が読み取れない段階の水準Aの出現率が圧倒的に高く約9割（88.7％）を占め、描画から活動内容が読み取れる段階の水準B（11.3％）よりも高かった（表10）。描画水準について性別の検討を行ったが有意差は認められなかった。本研究の描画内容が読み取れない段階の水準Aの割合は年長児を対象とした武藤・加藤（2013）のKFDの描画水準における活動内容が読み取れない段階（62.5％）、そして、武藤・加藤（2016）の年長児のKSD（78.7％）をさらに上回った結果となった。KFDの描画水準において女児の描画水準は男児よりも高いとの知見が幼稚園児と小学生を対象とした検討（山尾・田中、2004）や年長児を対象とした報告（武藤・加藤、2013）から得られているが本研究では性差は認められなかった。

表 10. 描画水準

	数字は人数 (%)		
	男児 (%)	女児 (%)	合計 (%)
水準 A	34 (89.5)	37 (88.1)	71 (88.7)
水準 B	4 (10.5)	5 (11.9)	9 (11.3)
合計	38 (47.5)	42 (52.5)	80 (100.0)

12. 基底線と太陽の出現

上部の基底線 (16.3%)、下部の基底線 (11.3%)、太陽 (22.5%)、雲 (17.5%) の出現率を性別に示す (表 11)。性差は認められなかった。年長児を対象とした松尾・加藤 (2016) では上部の基底線において女児 (32.9%) の出現率は男児 (12.1%) よりも有意に高かったけれども、年中児を対象とした本研究では女児の方が男児よりも出現率が上回っているものの有意差を認めるには至らなかった。

年長児の報告と比較すると、本研究の年中児の基底線は年長児 (松尾・加藤、2016) の出現 (上部基底線：22.8%、下部基底線：12.5%) よりもいずれも低いこと、年中児の太陽の出現率は年長児 (14.7%) を上回っていることなどから、これらの指標は年齢によって出現が異なるのかもしれない。

表 11. 性別にみた太陽、雲、基底線の出現

	数字は人数 (%)				
	男児 (%)	女児 (%)	合計 (%)	χ^2	p
太陽	7 (18.4)	11 (26.2)	18 (22.5)	0.69	—
雲	4 (10.5)	10 (23.8)	14 (17.5)	2.44	—
上部の基底線	4 (10.5)	9 (21.4)	13 (16.3)	1.74	—
下部の基底線	5 (13.2)	4 (9.5)	9 (11.3)	0.26	—

** p<.01

V. 全体考察

第1に性差について考察する。本研究の年中児のKSDにおいて性差がみられた指標は活動内容、シンボル、スタイルであった。活動内容において女児の「ブランコ・鉄棒」の出現は男児よりも有意に高い割合を示した。女児がシンボルを描く割合は男児よりも高く、その種類も男児を上回っていた。スタイルにおいては女児が男児よりも透視画の出現が有意に高かった。いずれの指標でも女児の出現率が多いとの特徴がみられたが、男児の出現率が極めて低

かったことも有意差が認められた一因と考えられる。例数を重ねたうえでの検討が必要である。これら3つの指標ではシンボルのように年中児・年長児で一貫して性差がみられる項目がある一方、年中児にみられた性差が年長児の結果と一致しない指標もあることから、性差が出現し始める時期が指標によって異なる可能性が示唆された。いずれにしても、例数の集積をした上での今後の精査が必要である。

第2に、本研究の年中児の結果は年長児の結果と共通する点や異なる点がいくつかみられた。本研究のサンプル数が少ないためにこのような結果となったこと、幼児期は描画の年齢的な変化が大きくその影響を受けていること、性差の影響を受けていること、などがその要因として考えられる。今後は、例数の集積をした上での発達による描画過程の詳細な分析が必要である。

謝辞

ご協力いただきました子どもたちと保護者の皆様方、先生方、関係機関に深謝致します。

引用文献

- Knoff, H. M. & Prout, H. T. (1985) : Kinetic drawing system for family and school: A Handbook. Los Angeles, CA: Western Psychological Services (加藤孝正他訳、学校画・家族画ハンドブック、金剛出版、2000)
- 加藤孝正 (1999) : 動的家族画 (KFD) の発達、臨床描画研究、14、30-42
- 松尾久枝・加藤孝正 (2013) : 保育所年長児のKSDの分析、日本描画テスト・描画療学会第23回大会抄録集、54
- 松尾久枝・加藤孝正 (2014) : 保育所年長児のKSDの分析 (第2報)、日本描画テスト・描画療学会第24回大会抄録集、44
- 松尾久枝・加藤孝正 (2016) : 保育所年長児のKSDのシンボルとスタイルに関する分析、臨床描画研究、31、104-124
- 武藤久枝 (2011) : 第3部4章 動的家族画、心理検査の実施の初歩 (願興寺礼子・吉住隆弘編)、ナカニシヤ出版、89-98
- 武藤久枝・加藤孝正 (2013) : 保育所年長児のKFDにおける活動内容の分析、中部大学現代教育学部紀要、5、

39-47

- 武藤久枝・加藤孝正 (2016) : 保育所年長児のKSDにおける人物像の特徴、中部大学現代教育学部紀要、8、29-37
- 鈴木眞雄・山田一郎・松田惺 (2003) : 動的学校画評定用紙の作成とその評価のための日本と韓国の比較、愛知教育大学研究報告、52、81-89
- 鈴木眞雄・山田一郎・岩田直治 (2004) : 動的学校画における人物像の相対的大きさと人物像間の距離の大小についての分析、愛知教育大学研究報告、53、1-5
- 高橋雅春・高橋依子 (2010) : 樹木画テスト、北大路書房

- 田中志帆 (2007) : 小・中学生が描く動的学校画の発達的変化、心理臨床学研究、25 (2)、152-163
- 田中志帆 (2011) : 荒れている学級の動的学校画、青山学院女子短期大学紀要、65、125-149
- 田中志帆 (2012) : 教育臨床アセスメントとしての動的学校画、風間書房
- 山尾沙耶香・田中吉資 (2004) : 幼稚園5歳児及び小学1年生の動的家族画、香川大学教育実践総合研究、9、101-114

受付日 2016年 9月30日

受理日 2016年10月27日

Abstract

The purpose of this study was to clarify the characteristics of KSD by 5-year-old nursery school children. The KSD was carried out for 298 5-year-old children at nursery school in 2013-14. 80 KSD (38 boys, 42 girls) were analyzed; the mean age of children was 63.5 months, and the other were incomplete drawings. Seven indices were used for the assessment of KSD: 1) Size of drawing person-figures (self, friends, teachers), 2) Drawing order, 3) Actions (drawing content), 4) Symbols, 5) Styles, 6) Location of drawing figures in the paper, and 7) KSD drawing level.

The results were as follows: 1) The drawing teacher-figures were largest in 42 children (52.4%). 2) Drawing order was self, friends, and teachers. 3) Actions appearing in the KSD and Drawing content categories were "PLAYING (47.4%)". 4) Girls showed significantly higher scores than boys in drawing symbols and styles. 5) The drawing friend-figures were located near the self-figures in 54 children (67.5%), and teacher-figures were located at the top of the paper in 34 children (42.4%). 6) KSD were divided into 2 classes. It was impossible to interpret actions from drawings in 88.7% of the KSD.

Keywords: kinetic school drawings, nursery school children, person-figures